

22

「燕行使」「通信使」と明末清初における
東アジア医学知識の連動

陳 明

北京大学東方文学研究中心

明末清初(16~18世紀)は東アジアの文化交流がかなり緊密な時期だった。中国医学の発展が直面した環境も以前といささか異なり、西洋の医薬学が次第に中国医家の視野に入り始めていた。西洋医学が中国医学に点々と浸透してただけでなく、それが中国文化受容史の永い周辺地域にも不断に拡散していた。そして朝鮮半島と日本の医家や士人も、中国医学に自らの貢献を重ねていた。この交錯した歴史情景の中で、中国が東アジア医学を独占した局面は終え、中一日・中一朝・朝一日・西洋一東アジアの4局面からなる多元的構造が形成されてきた。こうした複雑な文化構造の中で、朝鮮李朝が明・清の兩朝に陸続と派遣した「朝天使」と「燕(北京)行使」、および日本に派遣した「通信使」の一行がいかなる役割を担い、いかなる影響をもたらしたのかは大いに検討に値する。

朝鮮通信使の一行は途上の日本各地で当地の医家と直接対面し、双方の医薬知識交流では筆談が重要な方法だった。この結果として27種の日朝医家の筆談録が現段階で知られており、その主な内容は中国医学の知識である。他方、朝鮮から北京に入った一行中にも医官や医員が少なからずいた。彼らは旅上で発病したメンバーのみならず、北京朝廷の官吏や旅中での一般庶民にまで請われて治療している。これら医学に知識や興味のある使節員は、明・清の士人と応答する過程で、「医学知識の連動」にしばしば言及している。それらには新しい書籍・薬物・療法と習俗等があり、特に新奇で療効が広い薬になる物、例えば吸毒石・清心丸・落花生・ルソン果(苦果)等に彼らの連動がみえる。燕行使一行の著述には、医官や医員の名簿・治療記事があり、沿路上の疾病状況・医療施設・薬物をも真摯に観察した。例えば蔡濟恭(1720~1799)の『含忍録』巻下には「重訪新民藥肆」の一詩がある。のみならず、一般民衆が朝鮮医家と特効薬に示した態度等まで記録していた。これら記述は当時の医療社会史の研究と理解に非常に重要といえよう。

朴趾源(1737~1805)は18世紀朝鮮李朝の著名な思想家・文学家である。1780年、彼が朝鮮使節団の北京行に参与して著した『熱河日記』は、後期実学派の代表作の一つとされ、その影響は大きい。『熱河日記』には医薬関連の史料が少なくない。旅上で民衆が「真真高麗丸子(本物の高麗丸薬、清心丸)」に示した極めて大きな関心を記録する外、中国の医学典籍・理論と薬物にも注目して学び、朝鮮医学典籍の紹介まで記した。本書巻4「口外異聞」篇には砒答(Jada, アルタイ系シャーマンが雨乞いに用いた獣の結石)を記し、同巻の「東医宝鑑」条では当書の清版が印行され販売流伝している状況を叙述する。巻5の「金蓼小鈔」篇では多くの漢籍から経験方を少なからず輯録し、さらに朴趾源はこれら筆記を北京の拳人・王鶴汀に贈呈していた。朴趾源は北京で西洋の伝教師とも交流し、聞き及んだいくつかの西洋医薬知識に強い関心を抱き、琉璃廠の書肆まで出かけ、オランダの『小兒經驗方』と西洋の『収露方』の2書を探し求めている。「金蓼小鈔」篇には朝鮮の医薬状況への評論もある。むろん『熱河日記』自体は一種の遊歴雑録ではあるが、その中には中国・朝鮮と西洋の医薬学知識が蒐集されていた。本書は燕行使の行動を一層明瞭にし、東アジアの医学が連動していたことを理解するよい例証といえる。

前近代の東アジアでは、三国で政治・経済・文化の往来があったのみならず、医薬知識の連動もあった。さらに西洋医学の初伝と受容に言及するなら、三国相互間の伝承・フィードバック・協力と改造があり、「相互が絡み合い交錯」した景観を形成していた。このため互いを背景とした上での考察でのみ、当時の相互間の複雑な歴史と交錯した人間関係の現象を理解できるのである。